

自意識の功罪

—ワーズワスの『ティンタン・アビー』鑑賞—

藪 下 卓 郎

ワーズワス (William Wordsworth) の『ティンタン・アビー』(*Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey*) の構成上の特徴は、この詩を制作する直接の動機となった1798年7月におけるワイ河畔のティンタン・アビー再訪の印象と、それより5年前の秋になされた初回の同所訪問についての回想が対照されている点である。その初回の訪問というのは、この作品の67行目半ばから83行目半ばにわたって記述されている。この部分は量的に全体の約1割にすぎないけれど、この1回目の自然体験をベースにして、再訪時の体験が語られているのであるから、便宜上まずこの初回の訪問の内容を理解することから始めたい。

さてこの箇所において、ワーズワスはワイ川訪問時の自分を “like a roe/I bounded o’er the mountains” (67-68) と叙しているように、当時23才であったワーズワスは自然界の生き物同然であった。さらに “nature then.../To me was all in all” (72-75) と述べているのであるが、ワーズワスにとって自然は何にもましてかけがえのないものであったのである。要するにそのときのワーズワスにとって、自然は絶対的であり、自己は自然の中に包み込まれ、自然の一部であった、というわけである。さらに注目すべきなのは、それに続けてワーズワスが “I cannot paint/What then I was” (75-76) と述べていることである。“then” というのは、もちろん5年前のことであって、そのときの自

分の様子を描出できない、とワーズワスは告白しているのであるが、実はワーズワスは、すでにその1部を引用したとおり、

like a roe
I bounded o'er the mountains, by the sides
Of the deep rivers, and the lonely streams,
Wherever nature led:

(67-70)

というふうにある程度は当時の自分を叙述している。さらに続けてワーズワスは、そのように自然界を跳ね回った自分を、

more like a man
Flying from something that he dreads, than one
Who sought the thing he loved.

(70-72)

と述べている。これは当時のワーズワスが自然と交わるにいたった動機というべきものに言及している箇所であるが、愛するものを求めるというよりも、恐れるものから逃れる人のように自然の中へ入っていったというのは、一時心酔したフランス革命に対する失望から脱却する (Flying from) ために自然の懐へ戻るにいたった事情説明なのである。そういうわけであるから、ワーズワスは当時の自分の様子を描けないどころか、かなりの程度描き込んでいるわけである。それにもかかわらず “paint” できない、といっているのは、それだけそのときの自己存在についての意識が希薄であり、いいかえれば、それだけそのときの自分が自然と一体化していたということになる。

このように5年前のワーズワスは自然の子のように、自然の中に包み込まれていたわけであるが、注意しなければならないのは、その事実をワーズワスはそのとき、すなわち5年前に、詩として表わしたわけではないということであ

る。この作品がそれより5年後に書かれているとおり、5年前の体験は回顧の対象とされている¹⁾。ということはワーズワスはいま自分が当の体験の枠外にいるという意識にとりつかれているのである。いいかえればワーズワスはその体験が過去のものであるという時間意識にとりつかれていることになる。“Then”のくり返し(72, 76, 79)と“To me”(75, 79)のくり返しに注目してみよう。5年前の自然体験の真只中であって、「私にとって」という自然と自分との関係意識は存在しなかった。ところが5年後の今回、5年前の体験をふりかえって、「そのとき」の「自分にとって」の自然のありように、いまさらながら驚嘆しているのである。要するに無時間的、無意識的体験を、時間意識と自意識でもって回想しているわけである。

自意識と時間意識というのは、一般的に一方が他方を喚起するという相関関係を共有しているが、両者はこの作品の中心的テーマを浮き彫りにする視点とあってよい。そしてこの二つの意識がこの作品を立体的な構造に仕立て上げるとともに、同時にワーズワスの詩人としての限界をも示唆する結果を招いている。そういうわけでこの作品における自意識の功罪を探ることを本稿の眼目としたい。

さて第2回目の訪問を記す件りもまた、ワイ川周辺の自然の景観を巡って展開されている。しかしそれは自然そのものや、自然との交流の写實的描写から始まっているわけではない。この作品はその第2回目の訪問を記す件りから書き出されているのであるが、それはいみじくも“Five years have past”(1)という時間意識を表わす文句で始まり、その意識は“five summers, with the length / Of five long winters!”(1-2)というたたみかけによって強められている。以下ワーズワスは再訪したワイ川周辺の自然に相対したときの印象を記述するわけであるが、ワーズワスの意図は、眼前の風景をありのままに現前化することにあるのではない。そうではなくて、今回が自分にとって2回目の訪問であるという意識と、しかも以前のように我を忘れて自然の風景に見入って

いるのではなく、逆に我を意識して風景に接しているという二つの事実が特徴なのである。

次の引用にみられる同じ語と語法の反復に注意してみよう。

again I hear... (2)

Once *again* / Do I behold... (4-5)

The day is come when I *again* repose / ...and view (9-10)

Once *again* I see (14)

(イタリックは筆者。以下同じ)。

ご覧のとおりイタリック体に表記しなおした“*again*”という語が執拗にくり返されている。ワーズワスのなかには、この風景と相對するのが2回目であるという意識、そしてその間に5年の才月が流れたという時間意識が働いているのである²⁾。

次に注目したいのは、“I hear” (2), “Do I behold” (5), “I...view” (9-10), “I see” (14)という同じ語法の羅列と、それぞれの感覚動詞が以下に自然の風景を目的語にとっているという点である。ところで自然風景を見たり、自然風景に耳を傾ける叙述としては、これはごく普通の表現であるという見方があるかも知れない。しかしこの表現と5年前の自然との交流の記述とを比較してみると、この表現の特徴が浮き彫りにされるであろう。5年前の初回の訪問時の叙述は以下のとおりである。

The sounding cataract

Haunted *me* like a passion: the tall rock,

The mountain, and the deep and gloomy wood,

Their colors and their forms, were then to *me*

An appetite;

(76-80)

この数行のシンタックス上の特徴は、自然風景が主格となって、ワーズワス自

身が目的格の位置にあるという点である。そして主格である自然風景が目的格であるワーズワスに圧倒的に迫ってきたというのが、この一節の意味内容である。第1回目の訪問の記述を特徴づけるこの構文に比して、第2回目の訪問を描く構文が“I”を主格とし、自然風景を目的格にとっているのは、まさに主客転倒である。いまワーズワスは冷静・沈着に自然に相対しており、主導権が“I”にあるということ、いいかえればワーズワスの関心は自分自身に向けられているという点が大きな特徴なのである。しかも“I hear”, “I behold”, “I view”, “I see”という感覚動詞のたたみかけは、たんにそれらの動詞の対象の現前化を意図しているのではなくて、「見る」とか「聞く」とかいう自分の感覚的行為をワーズワスが意識していたということの証明といえるのである。

いまひとつ反復されている語に“these”という指示詞がある(3, 5, 11, 15, 16, 22)。眼前の風景がワーズワスにとって既知のものであること、ワーズワスがこれらの風景を知覚の対象として鮮烈に意識していることをこの反復は示している。

さて作品の順序からいえば、冒頭21行半において展開されている第2回目の訪問時の描写に続いて、第1回目の訪問と第2回目の訪問との間に経過した5年間に交されたワーズワスと自然との関係が語られる(22—49)。この間のワーズワスは自然界を離れ、都会という人間界を放浪していた。しかしその間もワーズワスは自然と無縁であったわけではないというのであるが、このあたりの告白から、ワーズワスの口調はいささか理屈っぽくなる。この連においてワーズワスは自然界から離れ、都会の喧噪の中にいながら、第1回目のワイ川訪問の恩恵を感じていたことをしみじみと語る。ワーズワスはまず生理的次元から精神的次元へと昇華してゆく「心地よい感覚」(“sensations sweet” 27)や道徳的な力を及ぼす「感情」(“feelings” 30)に触れ、そういう恩恵に浴することができたのも、「ワイ川の自然風景のおかげである」(“I have owed to them” 26)と語る。ワーズワスはさらに、倦怠の中にあっても、現世の不可

解な神秘の重荷を軽減してくれる「しあわせな気分」(“that blessed mood” 37) や、人間が肉体を脱して霊的存在と化し、事物の本性を見ぬくことができる「静かなしあわせな気分」(“that serene and blessed mood” 41) に浸ることができたのもやはり「ワイ川沿いの風景のお陰であろう」(“To them I may have owed” 36) とくり返している。

しかしワーズワスはほんとうにそれが第1回目訪問時の自然体験のおかげであると信じているのであろうか。ワーズワスが都会の喧噪の中にあっても、一種の至福感に浸ることがあったというのは事実であるかも知れない。しかしその至福感と初回のワイ川訪問時の体験は、どの程度たしかな因果関係にもとづいているのであろうか。ここにひとつ疑問を呈してみよう。“I have owed to them/ In hours of weariness, sensations sweet” (26-27) に続けてワーズワスは、“Nor less, I trust,/ To them I may have owed another gift,/ Of aspect more sublime” (36-37) と語っている。二つの引用のうちのイタリック体の箇所を比較していただきたい。前者の直截な表現に比べると、後者はいささかの躊躇いを強引に肯定しようとする目論見が窺われる。すなわちワーズワスの初回の自然体験と、それが生み出したという精神的・霊的至福感との因果関係には、かなり強引な意図がたくまれているのではないだろうか。そのような因果関係の不確実さは、“such, perhaps,/ As have no slight or trivial influence” (31-32) という表現における“perhaps”の挿入にも窺い知ることができる。

それかあらぬかワーズワスは、第3連の冒頭で、“If this/ Be but a vain belief” (49-50) といい出し、その帰結文をとりやめて、とにかく失意のときには、想像の上でワイ川へ帰っていったという事実(“have I turned to thee” 55) だけを述べる。それにしても22行目半ばから49行目半ばまで、長々と自然への恩恵を述べておきながら、なぜ突然「たとえそれがむなしい信念にすぎなかったとしても」などという仮定をめぐらせたりしたのであろうか。それは要

するに5年前の自然的原体験と5年間のブランクにワーズワスが経験したという至福感との因果関係が、ワーズワス自身にとってさえ不確かなものであったからではないだろうか。従って確かさの程度からいえば、22行目から49行目にかけて述べられているところの、都会生活の中で覚える至福感が以前の自然体験に拠るものであるとする神秘的な因果律（“I have owed” 26, “I may have owed” 36）は、実のところ続く第3連のもっと現実的な行為、つまり、“How often has my spirit turned to thee!” (57) という追憶・回想の行為ほど確かではなかった、ということになる。文型としては双方とも現在完了形であることから、確実性の度合いに変わりはないのではないか、という意見もあり得るかも知れない。しかし“have owed”という動詞の意味は、“have turned”という動詞に比べると、かなり主観的なワーズワスの思い込みを含んでいる。“have owed”が“may have owed”とトーン・ダウンし、そしてあらたに連を起こして“have turned”という最小限の確かな行為をワーズワスは告白したのではないかと思われる。同じ主語をもつ現在完了形とはいえ、こうして連を違えてワーズワスが記述したことは、やはりそれなりに意味上の段落があると理解すべきではないだろうか。すなわちワーズワスは第3連において、第2連におけるとは異なる次元において、過去の自然と向き合っていたことになる。

ところで宮川清司氏が『「ティンタン・アベイ」——新解釈の試み』という論文において同様な疑問を呈しておられる。この第2連に関しては、それまでの主語が“I”であったのが、42行目以下では“we”に変化している点を指摘され、「もちろんこれは、この種の体験が個人のものに限らず、もっと普遍性を持つものだ、という点を強調するためであろう。しかし別の見方をすれば、詩人独自の生々しい体験であるべきものがやむを得ず一般化され、いわば tone down して表現されざるを得なかった、とも解釈できる」⁴⁾と述べておられる。これはこの作品全体を一貫しているワーズワスの自己説得の論理の特徴

を指摘した卓見といえよう。ちなみに第3連ではふたたび主語は“*I*”となり、“*have I turned to thee*”という個人的行為が回顧されていることについてはいま指摘したとおりである。

さて2回目の訪問でワーズワスは何をあらたに発見したのであろうか。5年前の初回の訪問において、ワーズワスは動物的・本能的・原初的次元において自然と交わったのに比して、続く第4連において述べられている再訪時においては、ワーズワスは自然の中に「静かな、悲しい人間の音楽」(“*The still, sad music of humanity*” 91)を聞き、自然の内奥に霊的存在(“*A presence that disturbs me with the joy / Of elevated thoughts*” 94-95)を知覚するようになったことを告白している。ところが、こうして自然との交わりの次元が変わったことについてのワーズワスの心境はいかかなものであったか。そのあたりの様子は第1回目の訪問を記した部分と、第2回目の訪問を記した部分をつなぐ第4連の次のような箇所に微妙に表われている。

Not for this

Faint I, nor mourn nor murmur; other gifts
Have followed; for such loss, I would believe,
Abundant recompense.

(85-88)

“*this*”というのは、第1回目の訪問の際にワーズワスが体験した“*aching joys*” (84)や“*dizzy raptures*” (85)がすでに失せてしまったということを指しているのであるが、それにまさるじゅうぶんな償いが施されたのであるから自分は嘆くまい、気弱になるまい、とワーズワスはここで語っているのである。しかしこれにはどうも強がりめいた口調が感じとれる。“*Not... not... nor...*”という否定語のくり返しと、“*mourn... murmur*”という頭韻を踏んだ類語の反復は、この箇所の表現上の特徴として見逃すことはできない。この否定語のくり返しは、エンプスンの響みに倣えば⁵⁾、ワーズワスが否定しようとしたそ

のものに無意識のうちに引かれていたことを表わしている。すなわちワーズワスは、ともすれば“faint”し、“mourn”し、“murmur”しかねない状態にあった、というわけである。ところで“faint”、“mourn”、“murmur”といった語は、プレ・ロマンティックスが浸り、そしてコウルリッジにもいささかそういう傾向があった、メランコリックな情緒的ポーズを表わしている。ワーズワスはここでそのようなセンチメンタルな弱音を吐かないぞ、自然との一体感の喪失を心地よげに嘆いたりはいしないぞ、といった強い意志を述べているのである。

この箇所でいまひとつの特徴を指摘しておきたい。つまりワーズワスは初回のワイ川訪問で体験した喜びの喪失を、こともなげに“such loss” (87) という単音節の2語で処理している。これは5年前の自然体験が、ワーズワスにとってかけがえのないものであるにもかかわらず、それがいまや失われて回復不可能であるがゆえに、わざと貶めたい方である。それに代ってあらたに与えられた贈り物を、ワーズワスは“Abundant recompense” (88) という、さも量的な大きさを思わせる多音節からなる語で表わしている。これはいかにも思わせぶりの表現ではないだろうか。これは“such loss” (87) の甚大さを承知しながらも、その損失の実体を心ゆくまで味わおうとしないで、その損失を補う自然（内面化された自然、霊的自然）を性急に求めようとする心の現われとみてよい。厳密に言えば“Abundant recompense” (88) は“such loss” (87) を補うものではなく、実はそうあつてほしい (“I would believe” 87) というワーズワスの願望に他ならないのである。

このようにして5年前の自然体験と今回の再訪を比較した第4連は、この作品の中枢をなす部分であり、第1回目の訪問で体験した原初的な喜びを喪失した代りに、自然の内奥に深遠な霊的存在を感じるようになったという償いの価値をうたいあげようとしている。その償いの獲得はワーズワスの実感というよりも、願望にもとづいている、ということはいま指摘したとおりであるが、そもそもこの連でワーズワスは償いの獲得を確実なものとして目論んでいたわけ

ではない。第4連は次のように書き出されている。

And now, with gleams of half-extinguished thought,
With many recognitions dim and faint,
And somewhat of a sad perplexity,
The picture of the mind revives again:

(58-61)

これはワイ川の堤に立ちながら、心に刻まれた5年前の風景が甦える事実に言及しているところである。ところでその心象風景の再生は実に複雑な反応を伴っている。ワーズワスは“a sad perplexity”の状態にいるという。すでにみてきたように5年前の自然体験そのものは「うづく喜び」(84)、「めくるめく歓喜」(85)に満ちていた。しかしその体験を想起するとき、ワーズワスは「悲しい当惑」を覚えているのである。しかもその記憶はこの段階においては実に朧げである(“with gleams of half-extinguished thought,/ With many recognition dim and faint”)。しかしそれにもかかわらずワーズワスは続けて、

While here I stand, not only with the sense
Of present pleasure, but with pleasing thoughts
That in this moment there is life and food
For future years.

(62-65)

というふうに現在の喜びを味わうだけでなく、現在の瞬間に本来の生命と糧が宿っている旨を述べている。ところでこの趣旨は先の引用(58-61)と内容的に一貫していない。つまり58-61行では、過去と現在とのつながりが不確実であるにもかかわらず、62-65行では現在と未来との自然的生命のつながりについてワーズワスはあまりにも楽観的であるということである。

この点をシンタックスの点からいま少し検討してみよう。すなわち上に引用

した第4連冒頭の二つの文章は、ほぼ同じ構文から成立している。つまり前者が、“with..., With... The picture of the mind revives”であり、後者は“I stand... with... with...”となっている。そこで“with”の目的語を比較してみると、前者が“gleams of half-extinguished thought” (58), “many recognitions dim and faint, / And somewhat of a sad perplexity” (59-60) という曖昧な内容を含んだ表現であるのに比して、後者は“the sense / Of present pleasure” (62-63), “pleasing thoughts / That in this moment there is life and food / For future years” (63-65) という実に明解な内容をもった表現である。そして問題は前者に比して後者があまりにも明解すぎるという点である。たとえば63行目の“present pleasure... pleasing thoughts”における“p”の頭韻に注目してみよう。これはわざと快活さを響かせようとする意識的な技巧の現われとみてよい。さらに“in this moment there is life and food / For future years” (64-65) という表現が、ワーズワスの実感というよりは、ワーズワスが掲げた格言のように響くのである。そしてそれがワーズワスの実感でないことは、続く“And so I dare to hope” (65) によって明白になる。現在の自然体験が将来の生命や糧になるというのは、やはりワーズワスの願望にすぎないのである。

このようにしてワーズワスが自分にとって自然の力が不滅であるということを力説すればするほど、それだけ自然から疎外されたワーズワスの存在が浮き上がってくる。自然の森羅万象のなかに、霊的存在を自覚するようになったと告白したあと、ワーズワスは第4連の最後の一節で“*Therefore am I still / A lover of the meadows and the woods / And the mountains*” (102-104) と述べている。自分が依然として自然界を愛するものだ、という宣言めいたいい方は、無意識に自然と一体化した状態から生じたのではなく、意識的に自然とのつながりを顕在化させようとする意図にもとづいている。イタリックで示した“*Therefore... still*”というレトリック，“am I...”と倒置されたあとに改行

し、次行の冒頭に“A lover”⁶⁾をもってくる構文は、そういう意図を論理化しようとする証しといえる。

ワーズワスの根底に自然とのつながりについての不安があるからこそ、このような自己説得調の表現が重ねられるのではあるまいか。そして第5連もそのようなワーズワスの傾向の延長線上に展開している。

Nor perchance,
If I were not thus taught, should I the more
Suffer my genial spirits to decay:

(111-113)

これが冒頭の3行であるが、この箇所は構文・語法において、すでに言及した“If this/ Be but a vain belief” (49-50) と後出の“Nor, perchance-/ If I should be where I no more can hear/... wilt thou then forget/... Nor wilt thou them forget” (146-155) と重なり合っている。ワーズワスはこの作品において、同じ思考回路を再三巡っていたことになる。さて上の引用(111-113)に関していえば、せっかく第4連において、自然との交流にあらたな喜びを発見したことをうたっておきながら、ここでは「たとえそういう理解に及んでいなかったとしても、自分の生気は衰えることがないであろう」という仮定の話をしているのである。そして自分の生気が衰えることがない根拠というのは、以下ワーズワスが述べるとおり、妹ドロシーの存在である。その根拠はともかく、“If I were not thus taught”という仮定は、第4連で展開された論理、すなわち第1の自然を失ったが第2の自然を発見したという告白への疑念の表われを意味しないであろうか。これは第3の連冒頭の“If this/ Be but a vain belief” (49-50) という表現について呈した疑問と同じ内容のものである。その場合は、締結文を取りやめて、“yet, oh! how oft—” (50) というあらたな文が起こされ、最小限の事実として、現世の困難が心を悩ますとき、ワイ川へ帰って行った(“have I turned to thee” 55)という体験が述べられ

ていた。それに対してこの場合は“Nor perchance, / ... should I the more / Suffer my genial spirits to decay” (111-113) というふうに、精神の不滅性が告白されている。しかしその不滅性も“perchance”という語を伴う希望的観測であって、確信・断言とはいえない。しかもここで打ち消されている「衰える」(“decay”)という動作は、「生氣」(“my genial spirits”)の主体的な行為ではなく、ワーズワス自身がそれを「衰えさせない」(Nor ... should I ... suffer ... to decay) というのである。すなわちここにもワーズワスの意識的作用が働いている。それもこれも自然の喪失をワーズワス自身が実感しているからなのである。そしてその喪失の量感は、それを打ち消そうとして口をついた“the more”にはしなくも表わされている。

もちろん最終連の外面上の趣旨は、ワーズワスにとっての自然の不滅性、とくに自然の救済力の持続性にあり、その理由は先述したとおり、妹ドロシーが自分といっしょにいてくれることにあるというわけである。それだけワーズワスの自然信仰について、自然の権化のような妹の存在が不可欠であったということであろう。しかし読者はここではじめて、妹がこの場にいたことを知らされるわけである。これは作品としての構成上どうも唐突な感じがする。結論的にはこの第5連にもやはり、あらたにワーズワスが発見したという自然の喜びに対する自信のなさが流れていると思われるのであるが、いま少し詳しく読むことにする。

第5連の内容をまとめると以下のようなになる。妹ドロシーはちょうど5年前のワーズワスの状態にある。そして人間が自然を愛するかぎり、自然は人間を裏切ることなく、人間を高めてくれるのであるから、将来の妹も、ワーズワスがそうしたように、人間界の労苦にさいなまれることがあっても、このようにいっしょにワイ川を訪れたことを想い出して、心を癒すであろう、というのである。さてワーズワスはこの連で一体何をいわんとしているのであろうか。妹の将来を案じているのか、それとも自然の不滅性を称えているのか。そのどち

らでもあるまい。実はワーズワスは自己救済の道を模索しているのである。ということはそれまでの連において、あらたに発見した自然の喜びについて述べてきたにもかかわらず、それが実質的な自己救済につながっていなかったことになる。そしてその不安を解消するために、妹をかつての自分に重ね合わせることによって自己救済の確実性を信じようと努めている（信じているのではない）のである。

この連についていまひとつの特徴として指摘しておかなくてはならないのは、ワーズワスの自己中心主義ということである。ワーズワスは妹の未来像を描き、妹の未来を案じているたうにみえながら、実質上の関心は自分自身にある。すなわち妹が将来さまざまな人生苦に遭遇したとき、治癒力として働くのはワーズワス自身にまつわる彼女の思い出であろうというのである。たとえば

wilt thou remember *me*
And these *my* exhortations!
(145-146)

さらに妹が忘れないのは、

We stood together; and I, so long
A worshipper of Nature, hither came
Unwearied in that service:
(151-153)

という事実であるという。これではどうもこの連の冒頭の趣旨と逆の論理で話が展開していることになる。すなわち冒頭では、ワーズワスの生気が劣えないのは妹の存在ゆえである、と述べられていたのが、ここでは主客が転倒して、妹が救済されるのはワーズワスの存在ゆえである、というふうに読める。さらにワーズワスは妹が次のようなことも忘れないであろうと続ける。

these steep woods and lofty cliffs,
 And this green pastoral landscape, were to me
 More, dear, both for themselves and for thy sake!
 (157-159)

つまり妹ドロシーは、ワイ川の自然風景そのものではなく、その自然風景がワーズワス自身にとっていかに大切であったか、ということを想い出すであろう、というわけである。妹をめぐるって旋回していたワーズワスの思考が、だんだんとワーズワス自身に収斂してゆくのである。これは他ならぬワーズワスの自己中心主義の現われとみなしてよい。要するにワーズワスは自己救済の手段を考ずるにあたって、妹の将来をダシにしていたことになる⁷⁾。

ところで第2回目の訪問において、自意識をもって自然に対したということが、ワーズワスと自然との交流をよりダイナミックにしているということは確かである。自然との無意識な一体感をうたった第1回目の訪問の件りはそれなりに感動的ではある。しかし第1回目の無我夢中の体験は、なまの体験がもつ迫力はあっても、それだけで詩としての立体的な世界を構成するものではない。第1回目訪問の意義は第2回目の体験と対比されてこそ際立つといえる。かくして過去の体験、失なわれた体験、無垢の体験を際立たせるためにも、第2回目の体験の視点ともいえるべき自意識は、この詩の活力として働いているといっ
 てよい。しかし注意しなくてはならないのは、この自意識がワーズワスの自然体験を蘇生させるとともに涸渇させてもいるという点である。自然と自己をつなぐ微妙な緊張の糸として働いていた自意識が、かたくななままでの自己救済の願望へと転化していった次第は上でみてきたとおりである。そもそも自己とわたりあう生命力として意識されていた自然の存在が、自己に内面化され、吸収され、精神的・道徳的要素と化していったのである⁸⁾。

ところで自己救済をめぐるこの意志力の発揮はきわめてワーズワス的といえる。たとえば同じような失意に落ち入ったとき、コウルリッジは自虐的に自然

に対したり、意志薄弱といえるほどの無能さを告白し、最後には祈りという他力本願に拠ったことは彼の *Dejection: an Ode* に窺い知れるところである（注7を参照）。ワーズワスは失意の中にじっと身を浸す代りに懸命に克己心を發揮しようとするのである。ワーズワスの性格を“egotistical-sublime”と称したキーツ⁹⁾は、コウルリッジが“half knowledge”の状態にとどまることができない詩人であるとして批判した¹⁰⁾が、この批判はワーズワスにこそあてはまるであろう。おなじくキーツは「ティンタン・アビー」を書いた段階のワーズワスは人生の“dark passages”を模索しているがゆえに感動的であると述べている¹¹⁾。しかし同時にこの時点のワーズワスにあっては、すでに想像力による有機的な自然との交流に代って、想像力の膠着化による、自然の理性的・道德的解釈が支配的になりつつあったのである。

注

- 1) なまの体験ではなくて、それを追憶・回想の対象として意識するところにワーズワスの基本的な詩作のプリンスプルがある。ハートマンは次のように述べている。“Wordsworth was not used to make “A present joy the matter of a song”.” (Geoffrey Hartman, ‘Imagination in *The Prelude*, I and VI’, Raymond Cowell, ed., *Critics on Wordsworth*, London: George Allen and Unwin, 1973, p. 86)
- 2) このようにある一定の年月を隔てて同一場所を訪れたときの詩人の感懐というのは、W. B. Yeats の *The Wild Swans at Cool* のテーマともなっている。その作品でイエイツは悠久不変の白鳥に対して、以前とは異なる自己の存在を対比しているが、ワーズワスはこの詩において同じ対比から自己救済に踏み込もうとするのである。
- 3) ジェラルドはこの“have turned”という表現を“less sublime but more factual considerations”と表している (Albert S. Gérard, ‘Exploring *Tintern Abbey*’, Raymond Cowell, ed., *Critics on Wordsworth*, London: Allen and Unwin, 1973, p. 61)。
- 4) 『菅泰男・御典員三両教授退官記念論文集』 あぼろん社、1980年、350頁。
- 5) エンプソンは Keats の *Ode on Melancholy* の第1節 “No, no, go not to Lethe, neither twist...” に触れて、執拗な拒否の語の繰り返しに、かえって拒否しようとする対象に引かれている詩人の衝動を読みとっている (William Empson, *Seven Types of Ambiguity* (1930; rpt. ‘Peregrine Books’, Harmondsworth: Penguin Books),

p. 205)。

宮川氏もまたこの集中的な否定語使用に注目し、「否定されている特質が、実は厳然と存在しながら、同時にそこから逃れようとしていた一時期の青年の姿を髣髴させる」(前掲書352頁)という指摘をしておられる。

- 6) 類似した構文は “I, so long / A worshipper of Nature” (151-152) にもみられる。
- 7) このあたりの事情に関しては、キーツがその手紙の中で妹に示した無私の態度や、コウルリッジが自分の失意を愛人への祈りでもって静めようとした *Dejection: An Ode* の結末(次の引用参照)が対照的に想起される。

With light heart may she rise,
Gay fancy, cheerful eyes,
Joy lift spirit, joy attune her voice;
To her may all things live, from pole to pole,
Their life the eddying of her living soul!
O simple spirit, guided from above,
Dear Lady! friend devoutest of my choice,
Thus mayest thou ever, evermore rejoice.

(*Dejection: An Ode*, 132-139)

- 8) プリケットは “too rigid a moral utilitarianism to nature” をワーズワスの自然観の特徴としてとらえ、次のように述べている。“He is less concerned to feel his inter-dependence with nature than he is to find in it an immediate value, or ‘message’ for him.” (Stephen Prickett, *Coleridge and Wordsworth*, Cambridge U. P., 1970, p. 159) この趣旨は『ティンタン・アビー』にもあてはまる。
- 9) “As to the poetical character itself (I mean that sort of which, if I am anything, I am a member; that sort distinguished from the Wordsworthian or egotistical sublime; which is a thing per se and stands alone) it is not itself—it has no self—it is everything and nothing—” (Keats’ Letter to Richard Woodhouse, 27 October 1818, H. E. Rollins, ed., *The Letters of John Keats*, 2vols., Harvard U. P., vol. I, pp. 386-387)
- 10) “Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from the Penetralium of mystery, from being incapable of remaining content with half knowledge.” (Keats’ Letter to George and Tom Keats, 27(?) December 1817, H. E. Rollins, ed., *Ibid.*, vol. I, pp. 193-194)
- 11) “We are in a Mist—*We* are now in that state—we feel the “burden of the

Mystery". To this point was Wordsworth come, as far as I can conceive when he wrote 'Tintern Abbey' and it seems to be that his Genius is explorative of those dark passages." (Keats' Letter to J. H. Reynolds, 3 May 1818, H. E. Rollins, ed., *Ibid.*, vol. I, p. 281)

テキストの引用は J. O. Hayden, ed., *William Wordsworth, Poems*, vol. I, Penguin Books, 1977 に拠る。